

(チフリー・ガーデン・アンド・ガラス) オーディオツアーの音声翻訳

ようこそいらっしゃいました

Kyle MacLachlan, Actor: こんにちは、私は Kyle MacLachlan と申します。ようこそ Chihuly Garden and Glass の展示会にいらっしゃいました。Pacific Northwest (北西部太平洋沿岸) で育った私は、幸運にも子供のころからアートに感銘を受け、自分ではそれがコミュニティーにおける重要な柱だと思っています。ここ Emerald City では、Seattle Center Campus は、長年、訪れてくださった人たちが住んでいる人たちが同じように集まる場所で、アートが根付いてきています。Seattle Opera, Symphony、そして Ballet, Seattle International Film Festival (シアトル国際映画祭)、Seattle Repertory and Children's Theatres などがあり、アートが市の中心で息づいています。そしてさらに今、Chihuly Garden and Glass には、地域でよく知られたアーティストのビジュアルアートを展示しています。Northwest に住むアーティストで、そのガラス作品が有名な Dale Chihuly によって、メディアの境界を乗り越えてこの生き生きとしたアートの景観が変わりました。Dale は、この Exhibition を世界と分かち合うことでこの地区に恩返ししたいと考えています。彼の作品がこの町に織り込まれているように、今日は多くのストーリーをお話ししましょう。

Jeff Wright, Chihuly Garden and Glass の Chairman:

こんにちは、私は、Chihuly Exhibition の Managing Partner である Jeff Wright です。私と家族は、Dale をここ Seattle Center に紹介できることをとても喜ばしく思っています。この機会を頂いたとき、まず Dale の名前が頭に浮かびました Dale Chihuly - 彼は世界中に自分のアートを紹介してきた Northwest のアーティストで、ここに来ていただけたことをうれしく思っております。

Dale Chihuly, Artist: こんにちは、私は Dale Chihuly と申します。私の作品を Wright Family にご紹介いただけて大変光栄です。長年、何時も何をしたいかを人に聞かれると、展示にガラスハウスをデザインし、組み入れていきたいといつも答えていましたので、この Exhibition は私にとって大きな意味を持つものです。その日が来て、私の生涯をかけた作品を Pacific Northwest で分かち合うことができることを喜ばしく思っています。Exhibition をお楽しみいただければ幸いです。

GLASS FOREST (ガラスの森)

Dale Chihuly: 私は University of Wisconsin において、1967年にネオンの研究を始めました。その頃まではガラスの展示についての環境にはほとんど何も始めていなかったのですが、Jamie 氏と1970年ごろから研究を始めようと思いはじめました。

James Carpenter, Architect, James Carpenter Design Associates Inc.:

Jamie Carpenter と申します。私は New York に住む彫刻家であり、建築家です。一緒に仕事を始めた理由は、二人とも全く違うバックグラウンドを持っていたことです。つまり、Dale Chihuly 氏は明らかに織物と内装がバックグラウンドで、私のバックグラウンドはいわゆる建築の研究で、この光の関係全体と彫刻でもありました。ですので、とても違う観点から入ってきたようなものでした。それで、私たちは基本的には研究にとっても注意を払い、そしてこの材料で何ができるだろうかということ全体を押し進めてきました。そしてここでこの展示ができたわけで、これは70年代の初期のものです。この作品を見ていただいたときに何が素晴らしいかということ、それは、ガラスを流体とその流動性という感覚の上に立って広がりを持ち、それが持っている有機的な特性を物語っている、ということだと思います。

Dale Chihuly: これは、ホワイトガラスが炉の中で集まり、それから処理の過程を進んで、単にガラスが落ちて溜まった時の簡単な形状なのです。その塊の中にネオンを導入しましたが、それは技術的には少し大変でした。そしてそれは、アーティストが技術や新しいものに興味を持ち始めたころで、60年代の後期から70年代初頭のことでした。

NORTHWEST ROOM (北西部の部屋)

Dale Chihuly: 私が Italo Scanga 氏と Jamie Carpenter 氏を Washington State Historical Society に尋ねて行っていたのは1977年ごろだったと思います。そして私たちは彼らのアメリカ先住民の籠のコレクションを見ていて、私は「この籠をガラスで作ってみたいんじゃないだろうか」とひらめいたのです。籠は古くてしわしわで、必ずしもまっすぐで固いものではありませんでした。それで、何とかそれを非対称に作ってみたいという考えが浮かんだのです。まず、それをへらで叩いて少し打ち延ばしてみました。しかし、すぐに炉の熱と火を使うだけで、炎そのものからの動きと同じことが行え、そしてその方がもっと美しくなることが判りました。それはまさに私にとって突破口の連続でした。炎でガラスを形作ることをはじめ、それから重さで、熱でそして遠心力で。この驚くべき材料に人の息を吹き込み、それをどんどん限界まで吹いてできるだけ薄く延ばしてみると、とても熱くなってほとんど壊れそうになり、そして動き始めたのです。壊れそうな限界まで薄くして、新しい形を作ったのです。

Rock Hushka, Contemporary and Northwest

Art, Tacoma Art Museum の館長: ガラスの Baskets をよく見て Baskets の詳細な模様にご注意いただき、それから Trade Blanke を見ると、形状、色彩そして手触りにとても類似点があることが判ります。Dale 氏は、それを模倣したガラスの入れ物を作れることが判り、色々

なアメリカ先住民の文化の波うちや模様をガラスの模様で反映させる能力を使って、その仕事のひらめきに利用出来ることが判りました。

SEALIFE ROOM (海の生き物の部屋)

Pablo Schugurensky, Art Advisor: Sealife Roomのこのギャラリーの作品のすべては、Dale氏の海に対する愛情を写しだしています。Pacific Northwestで育ち、彼はいつも水を愛していました。Sealifeの姿はChihulyの展示によくあるものではなく、ChandeliersとTowersの所々にあるだけのものです。

Dale Chihuly: 私はSealife Towerを20フィート高くして、多くの人が見て楽しめるように多くの海の生き物を入れています。

Rock Hushka, Contemporary and Northwest Art, Tacoma Art Museumの館長: Sealife TowerのエLEMENTのすべては、ガラスが、その流動性ゆえに、どのように水や、水の中の流れを通して動いている生き物であるTowerの中を動いている海藻のような動きを見せるのかの特性に関する、Dale氏の深い理解を反映しています。そのすべては、解けたガラスが高温の中を、重力に引き寄せられ、ガラス吹きで曲げたりひねったりされ、そしてガラスを自然に流してやることで反映されているのです。

Dale Chihuly: 私は、Sealife Towerを作った、水が如何に私の作品に重要かをお見せしています。私がそれを作ったのと同じ喜びをお楽しみいただければ幸いです。

PERSIAN CEILING (ペルシアの天井)

Dale Chihuly: Persian シリーズは、私がペルシアのガラス、そしてローマのガラスとエジプトのガラスに興味を持った時に始まりました。そして、私の良き友であるMartin Blank氏がPilchuckにやってきて、彼には仲間がいました。彼とその仲間が私たちの作品を手伝ってくれ、ある種の小さなミニチュアを作ってくれたので、それをより精巧にして何をそこから作れるかを考えてみました。

Martin Blank, 彫刻家: 元々、Persianシリーズは模様と色彩の探求から始まりました。それらは、Seaformsから変形して、これらの貝の中にあるような特徴、たくさんの妙な出っ張りやとんがり、突いたり引いたりの特徴になり始めましたDale氏に対する私の役割は、新しい形を試して創り出すことでした。ガラス作品づくりでは思うようになったりならなかったりするエッジに取り組むことなので、それは真のPersianを創り出すとても難しい課題なのです。そして、ガラスをととても高温に熱する必要があるため、薄くなりすぎてこぼれ落ちて壊れてしまったり、十分高温ではないのでつまらない丸いプレートになってしまうため、Persianの創作はとても大変です。

Dale Chihuly: Persian Ceilingの創作では、誰もが見たこともないようなものを作ろうとしました。下へ歩み寄って見上げた途端に何を見ているのかが判るような。なんだこれは?そしてどんな感じがするの?そして良い感じがするように。

MILLE FIORI

Dale Chihuly: 私は多くの物に感銘を受けてきており、そのひとつは母が所有していたガーデンで育ったことです。多くの美しいシャクナゲやツツジを育てていて、私はガーデンで遊んで美しい自然に囲まれていました。それは私に大きな影響を及ぼし、それは色という形であったと思います。多くの展示は反射面のある黒いプレキシガラスの上にあります。私は反射材の作品が好きです。それは全く違う作品の側面を見せ、それを動かすにつれて見え方が変わります。

Stefano Catalini, Bellevue Arts MuseumのArtistic Director: 2003年にTacoma Art MuseumでMille Fioriを見たときは、驚くような体験でした。多くの期待をもってTacomaまで来ましたが、入室したときの体験は期待以上だったと思います。色が弾け、主な色は黄色、青、赤で、そしてその形でした。それらの形は明らかに自然で、有機体でありながら自然の命の制約を受けないものでした。自身の命を持っているように見えました。

Dale Chihuly: 形は、私がフィンランドのNuutajarvi、アイルランドではWaterford Crystal、そしてメキシコのMonterreyで行った作品にひらめきを得たものでした。それは15か12の異なる形で創り出されたシリーズです。

Stefano Catalini: Mille Fioriはイタリア語ですので、私には興味深いタイトルが付いています。「Mille fiori」は、イタリア語で「1,000本の花」の意味です。直接ガーデンングには関係しませんが、ある種の蜜に結びついています。蜂が、一種類ではなく、たくさんの花、1,000本もの花から花粉を集める時期です。Daleがこれらの主な色から創り出したこの芽や巻きひげのような形は、天然にあるようなオーガニックでねっとりした蜜を命の形に見立てていると感じるため、彼の作品が蜜というタイトルを付けていることはとても魅力的だと判りました

Dale Chihuly: これは、ガラス吹きのプロセスに大きく関わり合いもあります。私が作品を作りたいと思うような方法で形を試して新しい形を開発するとき、それは多くの場合には自然に属するものに見えてきます。ですので、それはガラス吹きのプロセスの組み合わせで、長年訪問してきた場所に影響を受けたものなのです。

KEBANA AND FLOAT BOAT 生け花と浮船)

Dale Chihuly:私はいつも水に惹かれてきました。私は、Pacific Northwestにある、Washington州のTacomaで育ちました。小さい頃はビーチでぶらぶらして日本の漁船を見つけ、フィンランドに行ったときはガラスを水に投げ入れて、それからここでご覧になっているようなフィンランドの手漕ぎボートにそのガラスを回収してみたりしました。

Gerry Ward, BostonのAmerican and Decorative Arts and Sculpture Emeritus Museum of Fine Art:

の彫刻家。この展示で皆さんがご覧になっているIkebana and Float Boats (生け花と浮船)は、1990年代中ごろにフィンランドのNuutajarviにおけるDaleの体験にヒントを得たものです。そこにいる間、ガラス工場の近くにある田舎の川に小さな橋から大きなガラスで作ったものを投げ込んだ時に頭に浮かんだものです。近くの子供たちがそれを拾い上げ、小さな手漕ぎボートに乗せて岸までもって帰ってきました。そして、Daleはそれを受け取ってまた投げ込んだのです。それをしばらく続けて、その木のボートの中でのガラスの見え方が本当に気に入ったのです。私は、これは彼が特に成功した展示だと本当に思いますそれは、ひとの頭にあるすべてのイメージを呼び起こし、それに眩い光を当てるものなのです。

DRAWING WALL (壁絵)

Dale Chihuly:1976年に事故にあってから、しばらくはガラスを吹いていましたが、あまりよく吹くことができなくなり、周りに人がいるのがいつも面倒でした。私は右側があまりよく見えず、深さを感じ取ることができませんでしたので、困っていました。私はそれほどでもないが、周りの人は困っていました。何故なら、皆私には自分が見えていないのではないかと心配していたのです。それで私が描くことを始め、描けば描くほどそれが好きになりました。ある時は描くことがガラスになり、ある時はそれはただの絵になり、それがエネルギーを開放する方法でした。ガラス吹きを進めている間に私の心身はクリエイティブになっていったのです。

Kiki Smith, アーティスト:彼は、ある意味動いてことを成していますよね。そして、きっとその後で何かを見出して判っているんだと思います。それも新しい経験を掘り起こす方法ですし、何かを言うことで色彩を見たり、エネルギーを形作っているんだと思いますよ。何かを何時か、したり繰り返したりするときに具体的な状況をセットアップしているわけで、そしてそのたびに何か新しいものが浮かんでくるんでしょう。

Dale Chihuly:最初から、ガラスと同じように描き終わりました。とても早くあつと言う間に。私はSeaformの絵とPersiansを鉛筆で描き始め、Venetiansではチャコールに替えて、それから多分先ずは水彩画で、それから液体アクリルで色を付け始めました。それから、Golden Acrylicsが液体アクリルを作っているのを知って10年ほど前にそれにしたのです。それを作ったのは彼ら

が最初だったのだと思います。それから、絵具を噴出させて容器そのもので描くようになりましたが、何か別の描き方がしたくなったときのために、スポンジとブラシとモップとほうきを何時も用意していました。私は描くということは人がそう思っているよりもはるかに大切なことなのだと思います。それは私の創作ではまさに核になることだと思います。描かなかつたら、作品は今の方向とペースでは進まなかつたでしょう。描くということが私の作品で本当に主な部分を占めているのです。

CHANDELIERS (シャンデリア)

Dale Chihuly:ある朝目が覚めて、「私の好きな街のベニスの運河の上にシャンデリアを掛けたい」と言いました。そしてそれをSeattle Art Museumで1992年に始めたChandelier シリーズで極端にやってみたのでしよう。Exhibitionにはあまりうまく出来なかった場所があり、展示を始める10日前にシャンデリアを作ろうと決めたのです。そして、私は数か月前に旅行中にBarcelonaのレストランであるシャンデリアを目にして、天井が低かったので、シャンデリアは目の高さに吊るされました。それは本当にきれいでした。座っているときにシャンデリアの下を見ると、テーブルの主役みたいに振舞っていました。私は、このシャンデリアを目の高さに吊るすというアイデアが気に入って、「シャンデリアは役割を果たさなくてもいいからそれを作ることができる」と言うことのきっかけになったのです。をれで、私は黄色のバルコニーに見えるようなChandelierをSeattle Art Museumのために作りました。それは500個ほどのパーツでできており、初心者でもできるような簡単な形でしたが、急いで作りました。それを何チームかのガラス吹きで10日間くらい作り、そこに吊るし、それは多分500か1,000ポンドで、それがChandelierシリーズの始まりなのです。

Patterson Sims:個人アート作家、彫刻家:Daleの場合は、びっくりするような慎重さともすごいおおらかさが同居していて、だから僕たちはいくつかの展示をシリーズで創ろうと決めました。最初は、彼は作者としてではなく展示のアーティストとして案内してくれてDaleの作品を見せてくれました。それは多分Daleにとってもある種の新しい方法で自分の作品を見ていた訳で、それがあつたのだと思います。何故ならその大規模で壮大な展示がものすごくよく知られたアーティストになったのですから。展示会が開催される数日前に、Daleには「もう少し何か」が要ると感じました。別のエレメントも見せる必要があると決め、そのエレメントが天井を本当に際立たせることになりました。それで、施設の壁と床の部分多くが、彼が天井をどうしたいと思うのかを見せるように、展示の為に変えられたのです。それで、彼が荒々しくバロック調のシャンデリアだと思ふような吊るされた作品を一群れ作り、そしてChandelierシリーズが生まれたのです。

MACCHIA FOREST (MACCHIAの森)

Ben Moore: ガラスアーティスト彼がGermanカラーを最初に見つけたのは70年台の終わりで、それは主にスタンドガラス業界のために生産された色付きガラスのドイツのメーカーで、それをここアメリカでスタジオガラスを作るために我々の用途に取り入れることができました。そして今までに、自分の色を自分で創り出し、その結果、とても大きな色のパレットではなくむしろ基本的なものになったのです。そして突然、「ボン！」3~4百もの色が使えるようになったのです。この巨大なパレットが突然作品に使えることはすごいことだとお判りになるでしょう。Daleには「これを活用してすべての色を使いたい」というアイデアがひらめき、それからはMacchiaのコンセプトやアイデアができたのです。

Dale Chihuly: 目が覚めたら、ドイツから買って帰った300色が使って、それ全部で作品を作ろう、と言うアイデアが生まれたのだと思います。それで、1つの色を内側に塗って、半透明か不透明の白を中間に使い、そして別の色を外側に塗りました。この白は白の塊で塗って手触りと多様性を持たせるようにしたため、雲のように見えるようになりました。ある日ある人が私について「この新しいシリーズは何だ？」という記事を書いていたので、「今これは「The Ugliers」のシリーズと呼んでおり、なぜなら母がそれを醜いと呼び、「The Ugliers」と呼んでるからです」と言いました。でも私は、「シリーズの名前でやるようなものではないと思っています」と言いました。それで親友のイタリア人のItalo Scangaを呼び出して言いました、「Italo君、このシリーズに名前を付けなければならぬんだ。spotted (まだら)なんだ。spottedの雲で、spottedの外見なんだ。」そして「イタリア語では「spotted」は何ていうのかね？」と聞きました。Italoは、「覚えていないな。イタリア語の辞書で見てみよう。彼はまた電話してきて、『Spotted』は『macchia』だよ」と言いました。

GLASSHOUSE (ガラスハウス)

Ryan Smith, 3form LightArtのPresident and Creative Director: Daleが最初にプロジェクトを見せたとき、彼は「これは外側と内側の展示になる」と言いました。そして、その異なる部分のすべてについて語り始め、プロジェクトの外側部分はガラスハウスになることが本当に明らかになりました。つまり、彼がずっと気に入っていた建物の、古い温室のすてきな絵ハガキを集めていたのです。彼が3か月くらいで作ったパビリオンの有名な話、PaxtonのGlass Exhibition Pavilionは、それはとてもきれいな大きな温室についての話で、作りが美しく、空間が美しく、彼のガーデンとガラスの展示を体験する一環になっているのです。それは、建物と、緑とそして屋外での体験のすべてなのです。

Dale Chihuly: Ryan Smith氏とOwen Richards氏とガラスハウスのデザインをできることはとても感銘深いものでした。私はずっとガラスハウスをデザインしたいと思ってきており、人生を通してガラスハウスの写真を集めてきていて、特に私の好きな建物です。ベニスのMatisse Chapel、パリの[Sainte] Chapelle 1851年の

Great Crystal Palaceなどの最も美しい小さなハウスが気に入っています。

Owen Richards, Owen Richards Architects: 弧状の形状はDaleが最も興味をもって取り入れたもので、何故なら19世紀の典型的な温室の形であったからですが、非対称な形状は、一方にSpace Needleの驚嘆すべき力強さを控え、他方にCenterとその周辺の主な建築物を置いたこの特別な場所にとって最善と思われる研究を通して発展したものでした。

Dale Chihuly: 私は、Glasshouseを作ることができ、そして同時にその中に入るようになるものも作ることができるとアイデアが気に入りました。そのことで、建物とその中に入るようになるアートも完全に思うままにできるのです。そして、私は中に入る巨大な彫刻を1つだけ作り、それは長さが100フィートで2フィートの高さであり、ほとんどが赤、黄、そしてオレンジです。それはGlasshouseの中が一杯になるようにデザインされましたが、それ以外にもスペースはあり、その美しいガラスの構造物の美しい表面に映し出すことができるのです。

GARDEN

Dale Chihuly: 私たちがデザインした美しいGardenは、おおよそ26,000平方フィートで、Richard氏と共に行くつかの展示物の周りの景観を共同でデザインしました。黄緑色のTower、赤いTowerがあり、Neodymium Reedsがあり、青いFioriがあります。実際のところ、警官がガラス作品の二の次になるようにすることができる興味深い方法の作品です。

Richard Hartlage, AHBLのPrincipal: Garden内で使うことになるピースが決まると、色について話し合い始めました。色は、どの植物を選ぶかの大きなファクターで、どの花の色かを選んでアートを補足しました。

Dale Chihuly: Gardenの中で見ることになるGlasshouseの前にそびえたつ黄色いSun、赤いMexican Hat Tower、緑色のIcicle Tower、ピンクのPolyvitro Tower、すべてのReedsを手に入れ、青や、赤、ネオジウムラベンダーのピース、これらすべてはフィンランドのNuutajärviの小さなガラス工場で作られたものです。

Charlie Parriott, アーティスト: 目の前にある、ガラスのReedsとその他のとんでもなく背が高く訳の分からない形の多くを見ていると、こんな形を作ることができると特別な場所Seattle中どこにもないような場所だと判ります。しかし、そんな場所は他にもあり、それはフィンランドのNuutajärviで、そこでできる理由は工場の天井はとても高く、25フィートあることなのです。それに加えて彼らが作る色は世界中の何処にも無いもので、Chihulyのチームは何度もフィンランドに行つてフィンランドのガラス吹きグループ、アートの学生そしてこの小さな工場の世話役と何も無いところから始めました。そして、Reedsや彼らの言うところのSaguaros

やSeal Pupsや我々にはない色々なものを作るためにそこに行きました。炉の中大きなオープン内にある、取り入れることのできる色ガラスの組み合わせのすべては、物体を作り出した2時間以内にゆっくりと冷まし、処理した場合に、皆さんが目の前に見ているような展示物になって別の側から出来上がってくるのです。

最後に

Kyle MacLachlan:Chihuly Garden and Glass (チフーリ・ガーデン・アンド・ガラス)にご来館いただき、ありがとうございます。このご来館で、Dale Chihulyとその作品、そして我が町の教育、市民生活、文化のニーズに尽くしているPacific Northwestのアート機関を、このプロジェクトで良く知っていただけることを祈ってやみません。

Dale Chihuly:ここPacific Northwestでごゆっくりお過ごしいただき、そこで見ることのできるすべてのアートとカルチャーをお楽しみください。